

湯築城跡(松山市)

ゆづき

築城年代: 建武2年(1335年)頃、築城者: 河野氏



湯築城跡全景 (南から)

愛媛県埋蔵文化財センター「湯築城跡」より

道後公園(湯築城跡)全体図





ここは道後公園北口





公園に入ると内堀(左手)がある/正面に説明坂がある





国史跡 湯築城跡

ゆづきじょうあと

National Designated Historic Site, Yuzuki-Jo Site

국가 지정 사적 유즈키성 유적지

国家指定历史遗迹 汤筑城遗址 國家指定古蹟 湯築城遗址

湯築城跡は、室町時代伊予国守護であった河野氏の城跡で、当時伊予国の政治の中心地でした。

河野氏は、風早郡河野郷（松山市北部）を本拠とした豪族で、12世紀末の源平合戦で源氏方として活躍し、鎌倉時代には伊予国で最も有力な武士になりました。河野氏が湯築城に本拠を移したのは、14世紀前半河野通盛の時といわれています。当時の道後は、道後温泉に古くから天皇が来湯するなど人々の往来が多く、伊予国内では経済的、文化的な要地でした。その後、河野氏の歴代当主が伊予国守護に任命されるようになると、この地は政治的な中心としても栄えるようになりました。河野氏は水軍としても知られ、海賊衆として有名な来島村上氏もその配下でした。

湯築城は、はじめはいざという時に丘陵を城として利用するだけでしたが、16世紀半ばに河野通直が、外堀を掘り、その土で土塁を築いて、現在のような大規模な城となりました。戦国時代に平地の岡を二重の堀と土塁で囲った城は、全国でも大変珍しいものでした。

1585年に全国統一を目指す豊臣秀吉に攻められ、河野氏は降伏し、湯築城はまもなく廃城になったといわれています。江戸時代は松山藩が管理し、一般の人が立ち入ることは制限されていました。明治時代に入り、1888年に「道後公園」と

The Prov
in ly
The
Mat
cen
Kar
the
Mi
vis
he
of
o
T

いう名で広く一般に開放されるようになりました。道後温泉本館（国重要文化財）建設を進めた道後湯之町伊佐庭如矢町長いさにわゆきやによって公園として整備され、にぎわうようになりました。

1988年から12年間発掘調査がおこなわれ、25万点にも及ぶ土器等が出土し、戦国時代の遺構が良好な状態で残っていることが確認され、歴史上重要な遺跡として、2002年に国の史跡に指定されました。

湯築城の規模は、外堀を含め、南北約350m、東西約300mで、広さは約8.5haあります。中心は標高差31メートルの小高い丘陵で、「本壇」「杉の壇」と呼ばれる平坦地があり、最も高い本壇からは、松山城や遠く伊予灘を見ることができます。発掘調査により、城の南東側は上級武士の生活の場、南西側は城主に仕える武士が暮らす場所だったことがわかっています。

また、湯築城の西には城下町が広がっていました。北には石手寺、義安寺、宝巖寺、湯神社など河野氏とゆかりの深い寺社がありました。戦国時代に日本を訪れたイエズス会の宣教師ルイス・フロイスは、「道後の市」と呼ばれ大変栄えていた様子を『日本史』の中に記しています。

その内堀の先はこんな塩梅



内堀の右手の平場/この右手には土塁(消滅)、そして外堀がある



内堀の左手のこの遊歩道から本壇(本丸)を目指す



そこで左手を見ると内堀が回り込んで続いている



さて、ここをまっすぐ登って行くのだが、左手に覆屋がある



これは「石造湯釜」の覆屋



石造湯釜 一基

愛媛県指定有形文化財（建造物）
昭和二十九年一月二十四日指定

湯釜は、浴槽内の温泉の湧出口に設置するもので、これは現在の道後温泉本館ができた明治二七（一八九四）年まで使用されていたものである。

直径一六六、七センチメートル、高さ一五七、六センチメートル、花崗岩製である。奈良時代の天平勝宝年間（七四九〜七五七）につくられたと伝えられる。

湯釜上部に置かれた宝珠の「南無阿弥陀仏」の六字名号は、河野通有の依頼により一遍上人が刻んだものといわれている。

湯釜本体に刻まれた温泉の効験に関する文は、天徳寺の徳応禅師の撰文になるもので、享禄四（一五三二）年、河野通直が石工を尾道から招いて刻ませたものである。

松山市教育委員会



左手から登る遊歩道もあるようだ



さて、遊歩道をまっすぐ登って来ると、左手に登って行く遊歩道がある



ここを登って行く



途中でまた折れて登って行く



ここが杉の壇(二の丸)



左手を見たところ



右手を見たところ



説明坂がある



道後公園 (JUNJIYUKU 2)

DOGO PARK

道後公園は、外堀を北に「HOE」、東堀を「OOE」、

中堀は「中堀」の三堀に囲まれていた。

明治二十一年に創立道後公園となりました。

明治十九年の道後公園開園式が行われ、

明治二十一年に創立道後公園となりました。

湯築城跡 (ゆきしろじきんしろ)

YIZUKI-JO SITE

湯築城跡は、伊予湯築藩の城跡で、その中に居住空間を持つ先駆的な「町山城」の形跡をなす。

中堀は、中堀を「中堀」の三堀に囲まれていた。

明治二十一年に創立道後公園となりました。



伊予湯築古城之図

湯築城跡の位置は、湯築藩の城跡で、その中に居住空間を持つ先駆的な「町山城」の形跡をなす。

道後公園

DOGO PARK

道後公園 (ユニバーシタリ)

DOGU PARK

道後公園は全体で約八・六ヘクタールあり、外堀を含め南北約三〇〇E、東西約三〇〇E、

中央部は海拔約七〇E(比高約三〇E)の丘陵部となっています。

外周は外堀で囲まれ、丘陵を取り巻くように内堀があります。

明治十九年に設置された道後植物園を前身とし、明治二十一年に県立道後公園となりました。

昭和六十二年の道後動物園移転に伴い、昭和六十三年から発掘調査を実施したところ、

昭和六十二年の道後動物園移転に伴い、昭和六十三年から発掘調査を実施したところ、

湯築城跡の遺構や遺物が数多く出土しました。

十二年間におよぶ発掘調査によって、遺構として、道路、礎石建物、土塀などが検出され、

遺物として、土師質土器、輸入陶磁器などの土器類や武具、建築用具の金属製品など

約二十五万点が出土しています。

湯築城跡の遺構は、全国的にみても、中世守護の城館としてまれに見る良好な状態で残っており、

極めて貴重な遺跡であることが明らかになりました。

この遺跡を保存・活用するため、復元区域では、武家屋敷や土塀などの復元、

出土遺物・遺構の公開を行っており、散策・休憩しながら楽しく歴史を学べる場としてあります。

湯築城跡(ゆづきじょうのあと)

YUZUKI-JO SITE

湯築城は、二重の堀と土塀を巡らせ、その中に居住空間を持つ先駆的な「平山城」の形態をなす

中世伊予国(現在の愛媛県)の守護河野氏の居城として、約一五〇年間存続しました。

南北朝時代の初め頃(十四世紀前半)、河野通盛によって築かれたといわれています。

通盛の祖先には、十二世紀末の源平合戦の際、水軍を率いて活躍した通信、

十二世紀後半の蒙古襲来の際活躍した通信があります。

通盛は、それまでの河野氏の拠点であった風早郡河野郷(現在の北条市)からこの随後の地に移りました。

築城に関する文献は残っていませんが、河野郷の居館が寺(善応寺)になった時期や、

忽那家文書の記述などから、遅くとも建武年間(一三三四年～一三三八年)には築城されたと推定されています。

河野氏は、その後讃岐から攻め入った細川氏との戦いに敗れ、湯築城は一時占拠されましたが、

守護職とともに湯築城を奪い返しました。

しかし、近隣諸国から幾度となく攻撃を受けたり、お家騒動(惣領職の継承をめぐる分裂)や

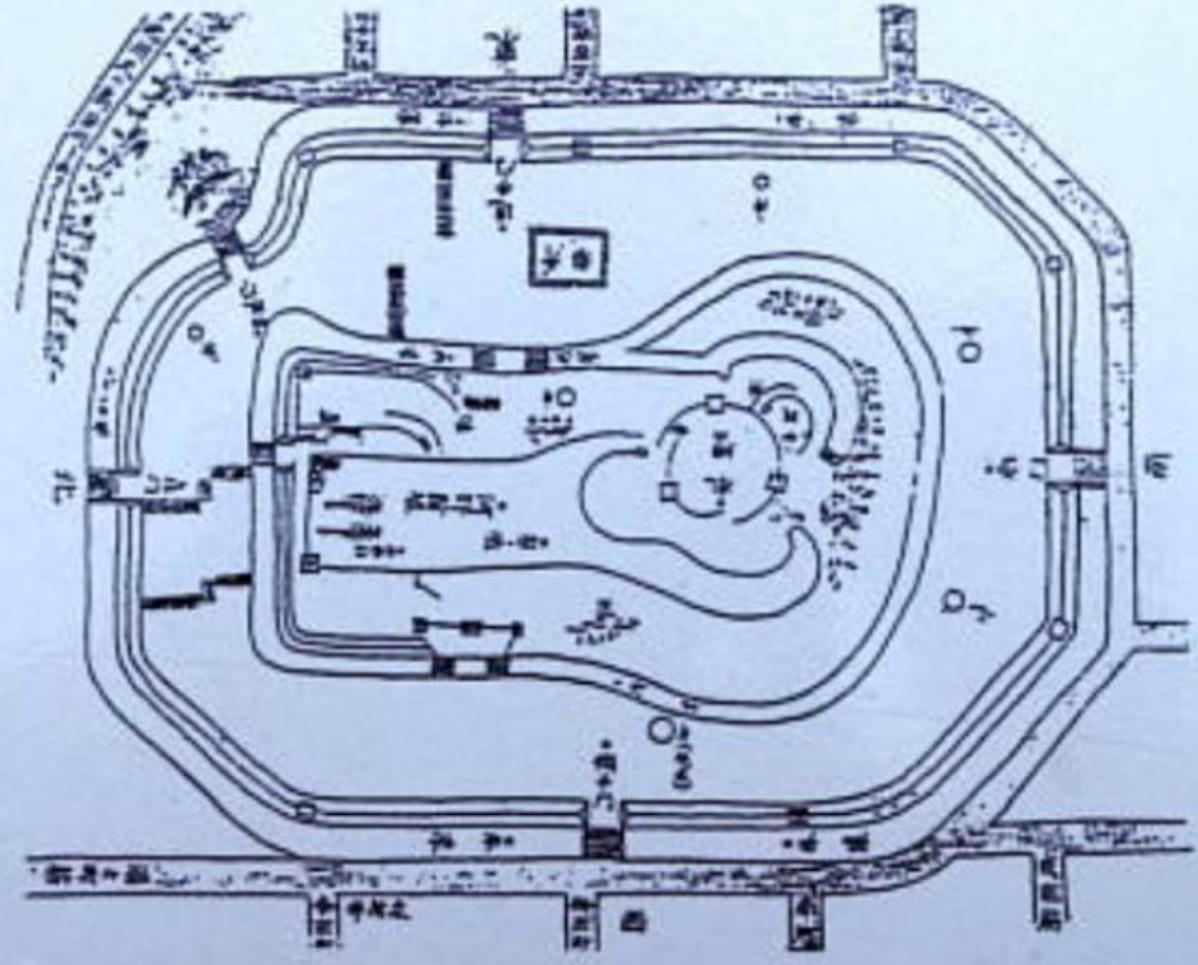
内紛(家臣の反乱)を繰り返し、その地位は決して安泰ではありませんでした。

天正十三年(一五八五年)、全国統一を目指す羽柴(豊臣)秀吉の命を受けた小早川隆景に湯築城は包囲され、

河野通直は降伏し、やがて湯築城は廃城となりました。

河野通直は降伏し、やがて湯築城は廃城となりました。

伊予湯築古城之圖



伊予湯築古城之圖

此圖係根據古蹟遺跡及文獻資料繪成。其中心部分為本丸，周圍為二重三重之堀。城內設有各種建築，如本陣、御殿、書院等。此圖為研究伊予湯築古城之重要參考資料。

杉の壇を南側から北方向に見たところ/正面にも説明坂がある



すぎ の だん
杉ノ壇

Suginodan
杉壇

스기노단(杉ノ壇)
杉之壇

河野氏の時代にここがどのように呼ばれていたかはわかりませんが、江戸時代に書かれた『予陽郡郷俚諺集』に「杉ノ壇高七間、東西十二間、南北四十五間三尺」と書かれています。当時、二本の杉があったことから名づけられたようです。

発掘調査では、鍛冶炉^{かじ}、瓦敷遺構や礎石列、堀切などが確認されています。特に北側では多数の鍛冶炉が見つかり、鍛冶に関する鞆の羽口^{てっさい}・鉄滓^{はくへん}・鍛造剥片も出土しています。鍛冶炉の構造を確認するために掘った遺構の調査では、金属分析の結果、砂鉄を原料とした精錬鍛冶を行っていたことがわかりました。城内の調査では砂鉄を原料とした釘も見つかっていて、ここで作られた釘が使われていたようです。

南の山裾では、幅2.4m、深さ1.5mの堀切も見つかっています。この堀切は、ある段階に真砂土で埋め戻されていました。

※「杉ノ壇」は江戸時代以降の呼称であり、湯築城が機能していた時期の呼称ではありません。

さて、南側の左手の遊歩道を登って行こう/右手を下って行くと内堀の所に出るようだ



これは最近の石垣のようだ



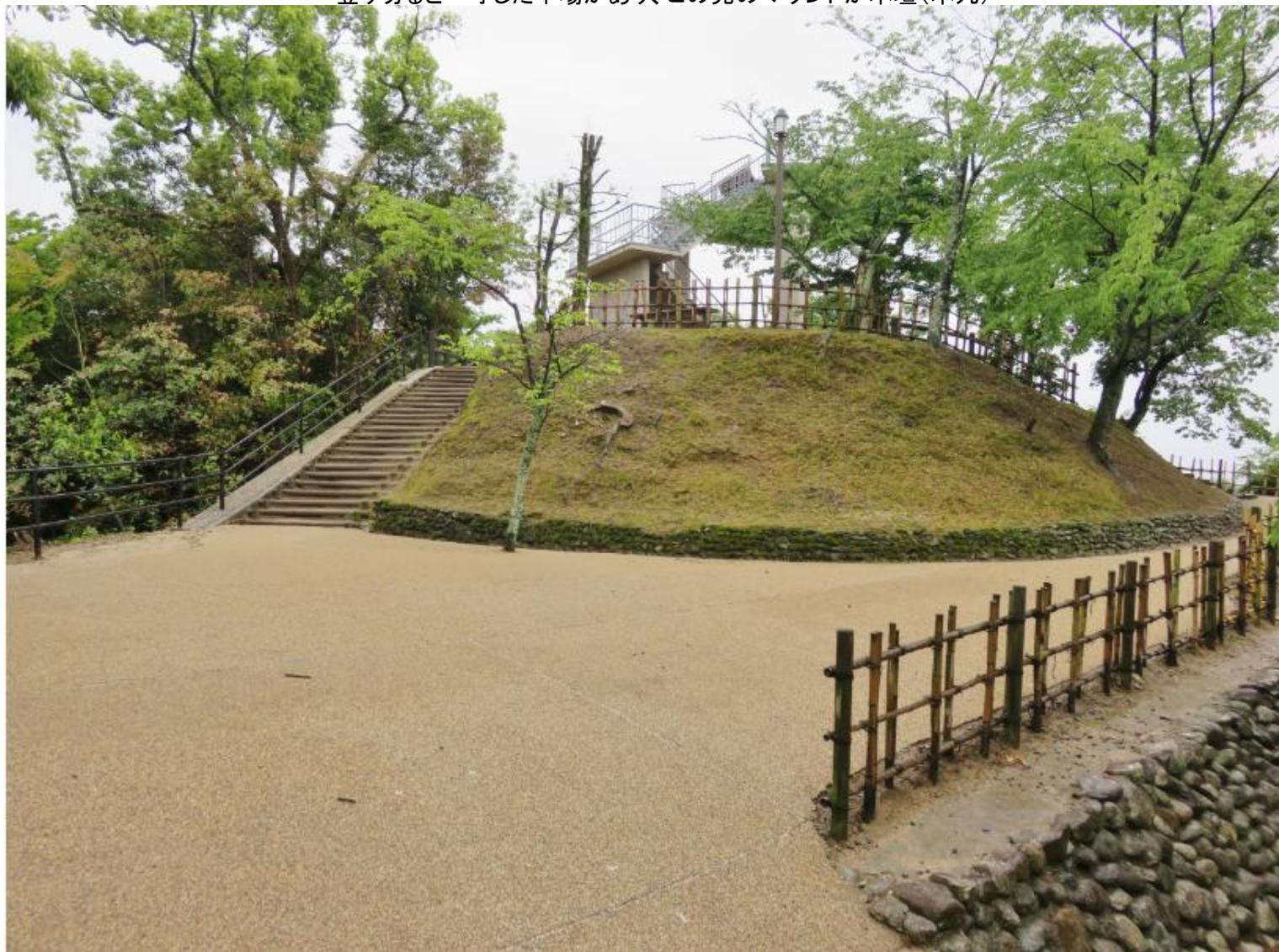
この先を左手に折れる



こちらにも石垣がある



登り切ると一寸した平地があり、この先のマウンドが本壇(本丸)



説明坂がある



ほんだん Hondan ほんだん(本壇) 本壇 本壇 本壇

河野氏の時代にここがどのように呼ばれていたかはわかりませんが、江戸時代に書かれた『予焉郡獲倭伝集』に「本壇高四十五間三尺、東西十二間、南北十一間三尺」と書かれています。

沼袋城では最も高い位置にある郭(標高71.4m)で、河野氏に關係の深い瀬戸内の海も西に見ることができます。現在、面積約420㎡、東西約32m、南北約20mの規模があります。発掘調査を行いました、大部分は地山が露出して、出土遺物もほとんど見つかりませんでした。

※「本壇」は江戸時代以降の呼称であり、沼袋城が機能していた時期の呼称ではありません。

We don't know what they were called during the times of the Kono Clan, but in the proverbial compilation Yoyo Gungo Figenfu, there is a line that says, "Hondan, height of forty-five-ken and three-shaku. East to west, twelve-ken. North to south, eleven-ken and three-shaku." (ken = 1.82 m, shaku = 30.3 cm)

At the enclosure with the greatest height at Yuzuki-Jo (71.4 m tall), you can see out to the Sado Inland Sea that the Kono Clan shared a connection with.

As of now, the location has a surface area of 420 m², 32 meters from east to west, and 20 meters from north to south. Excavations have been done, but for most sections, the bedrock is exposed and not many remnants were found.

"Hondan" has been the nomenclature since the Edo period and not from the time period when Yuzuki Castle was still functioning.

我们并不知道在河野氏所处的时代这里被称作什么。但在江戸时代编著的《予焉郡多倭伝集》中有“本壇高四十五間三尺、東西十二間、南北十一間三尺”的记载。

在上述城中最高处的塔城(海拔71.4m)便可向东南望与河野氏通商频繁的瀬戸内海。

现在本壇面积约为420㎡、东西约32m、南北约20m。虽然进行了挖掘调查，但此处绝大部分都是原有的自然地基，基本未有出土物。

※本壇是江戸时代以降的称呼，并非沼袋城发挥其功能时期的称呼。

고노씨의 시대에 여기서 어떻게 불렸는지는 모르지만, 옛도 시대에 쓰여진 『요요군그리전후(予焉郡獲倭傳集)』에 「본단 높이 45간 3척, 동서 12간, 남북 11간 3척」이라고 기록 있습니다.

우즈키성에서는 가장 높은 위치에 있는 타(표고71.4m)으로, 그노 세와 경계가 깊은 세토우치의 바다도 서쪽으로 볼 수 있습니다.

현재, 면적 약420㎡, 동서 약32m, 남북 약20m의 규모입니다. 발굴 조사를 하였지만, 대부분은 지반이 그대로 노출되어 있고 출토 유물도 거의 발견되지 못하였습니다.

※ 「본단」은 에도 시대 이후의 호칭이며, 우즈키 성이 기능하고 있었던 시기의 호칭이 아닙니다.

此處在河野氏時代如何稱呼已不可考，但江戸時代的著作『予焉郡獲倭傳集』有記載「本壇高四十五間三尺、東西十二間、南北十一間三尺」。

這裡是沼袋城位置最高的城郭(標高71.4公尺)，也可眺望與河野氏有繁榮通商關係的瀬戸内海。

此處目前面積約420平方公尺、東西約32公尺、南北約20公尺。雖然有進行挖掘調查，但大部分皆為原有的自然地基，幾乎沒有發現出土遺物。

※本壇是江戸時代以降的稱謂，並非沼袋城發揮其功能時期的稱謂。

ほん だん
本壇 Hondan 혼단(本壇)
本壇 本壇

河野氏の時代にここがどのように呼ばれていたかはわかりませんが、江戸時代に書かれた『よ ようぐん こうりげんしゅう予陽郡郷俚諺集』に「本壇高四十五間三尺、東西十二間、南北十一間三尺」と書かれています。

湯築城では最も高い位置にある郭（標高71.4m）で、河野氏に関係の深い瀬戸内の海も西に見ることができます。現在、面積約420㎡、東西約32m、南北約20mの規模があります。発掘調査を行いました。大部分は地山が露出していて、出土遺物もほとんど見つかりませんでした。

※「本壇」は江戸時代以降の呼称であり、湯築城が機能していた時期の呼称ではありません。

こちらから本壇へ登る



本壇(本丸)には展望台があった



これは本壇の南東側から南東方向を見下ろしたところ/下に平場がある



その平場へ下りて本壇を見上げたところ



左手に下りて行く遊歩道がある/東側(大手門があったらしい)に下りて行くようだ



さて、これは展望台に登って南西方向を見たところ



その左手(南方向)を見たところ



更に左手(南東方向)を見たところ



そこで下を見ると先程本壇の南東下にある平場を見下ろした場所が見える



さて、これは右手(西方向)を見たところ/前方の山の上に松山城が見える



その右手を見たところ



更に右手(北西方向)を見たところ



さて、杉の壇(二の丸)から右手の遊歩道を下って行こう



内堀の所へと出る



左手の樹木の中に埋もれるように説明板があった



湯築城址の由來

この地は元伊佐庭岡と呼び今から千三百餘年の昔聖徳太子が鶴駕を駐め道後温泉碑を建てられた處である後建武年間に至り河野氏はその居を高繩山麓の河野郷のこゝに移し城を構へて湯築城と稱した蓋し伊佐庭岡は湯築岡とも呼ばれたからであらう爾來同氏の本據となつてゐたが天正十三年豊臣氏の征討により滅土の悲運を見たそれから多少の沿革を経て慶長七年加藤嘉明が松山城を築くに當り城址の礎石を勝山に搬び去つて後は全く廢墟となり藩政時代には修竹鬱々たる烏鷺の棲みかと思はれて世にお竹箴と稱せられた然るに明治廿一年愛媛縣はこれを公園とし大に景觀を整へ花卉を植ゑる民衆樂の處としたかくて昭和二十八年に至つて縣立動物園が設けられた惟ふに河野氏累世五十餘代その中には水軍の將として外寇を斥攘した武將河野通有や念佛絶對主義の時宗を創めて衆生済度の實を挙げた聖僧一遍上人の如き偉人を輩出した共に我が郷土の榮譽と稱すべきことである

昭和三十四年十二月

建立寄贈者一遍もりの本舖

一遍堂主 新田兼市

これは内堀を渡る土橋から南方向を見たところで、右手は内堀土塁/手前に説明坂がある

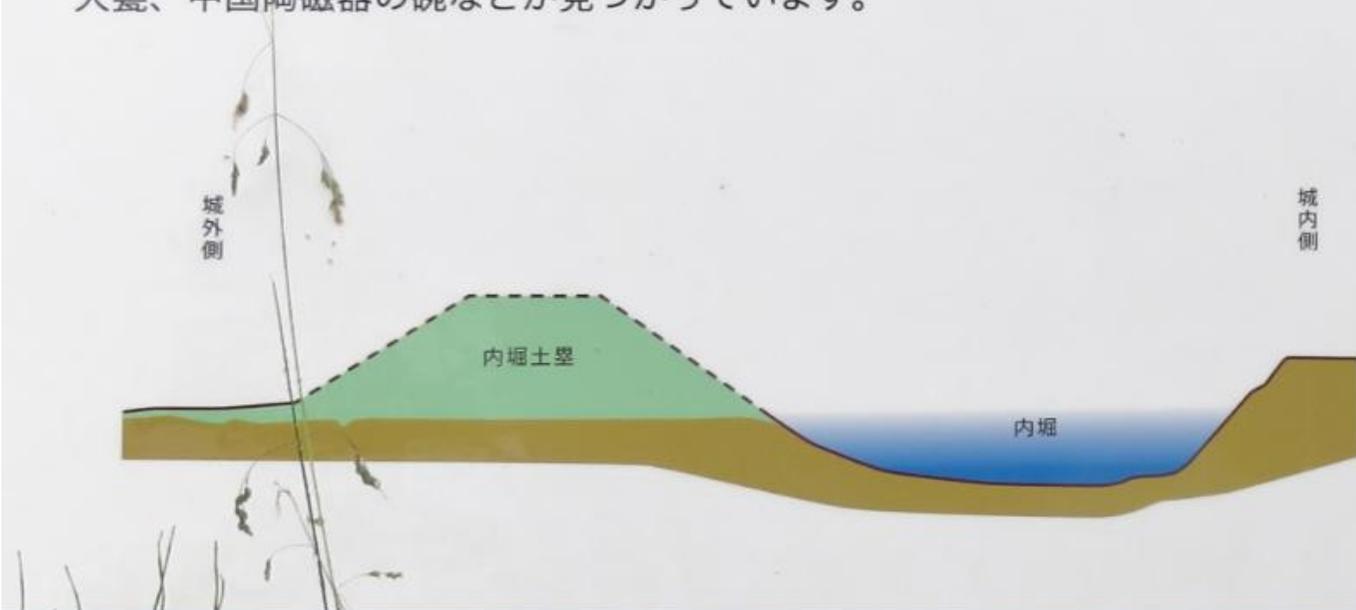


うち ぼり うち ぼり ど るい
内堀・内堀土塁

Inner Moat, Inner Moat Mount
内护城沟・内护城沟土塁

안쪽 해자, 안쪽 해자 토루
内護城河、内護城河土壘

湯築城には二重の堀があります。発掘調査で、この付近の内堀の外側にも内堀土塁があったことがわかっています。上が削られているため幅は確認できていませんが、少なくとも95センチメートル以上ありました。土師質土器の皿や杯、備前焼の大甕、中国陶磁器の碗などが見つかっています。



こんな塩梅で左手に回り込むように内堀と内堀土塁が続いている/左手が城内側



振り返って北方向を見たところ/こちら側の内堀土塁(左手)は消滅している/右手は城内側



これは内堀土塁を外側から南方向に見たところで、前方に見える建物は武家屋敷2のようだ/家臣団居住区などが再現されている



そこから右手(西方向)を見ると搦手門がある/両サイドは外堀土塁



からめ て もん
搦手門

Karamete-mon 가라메테몬
搦手門 搦手門

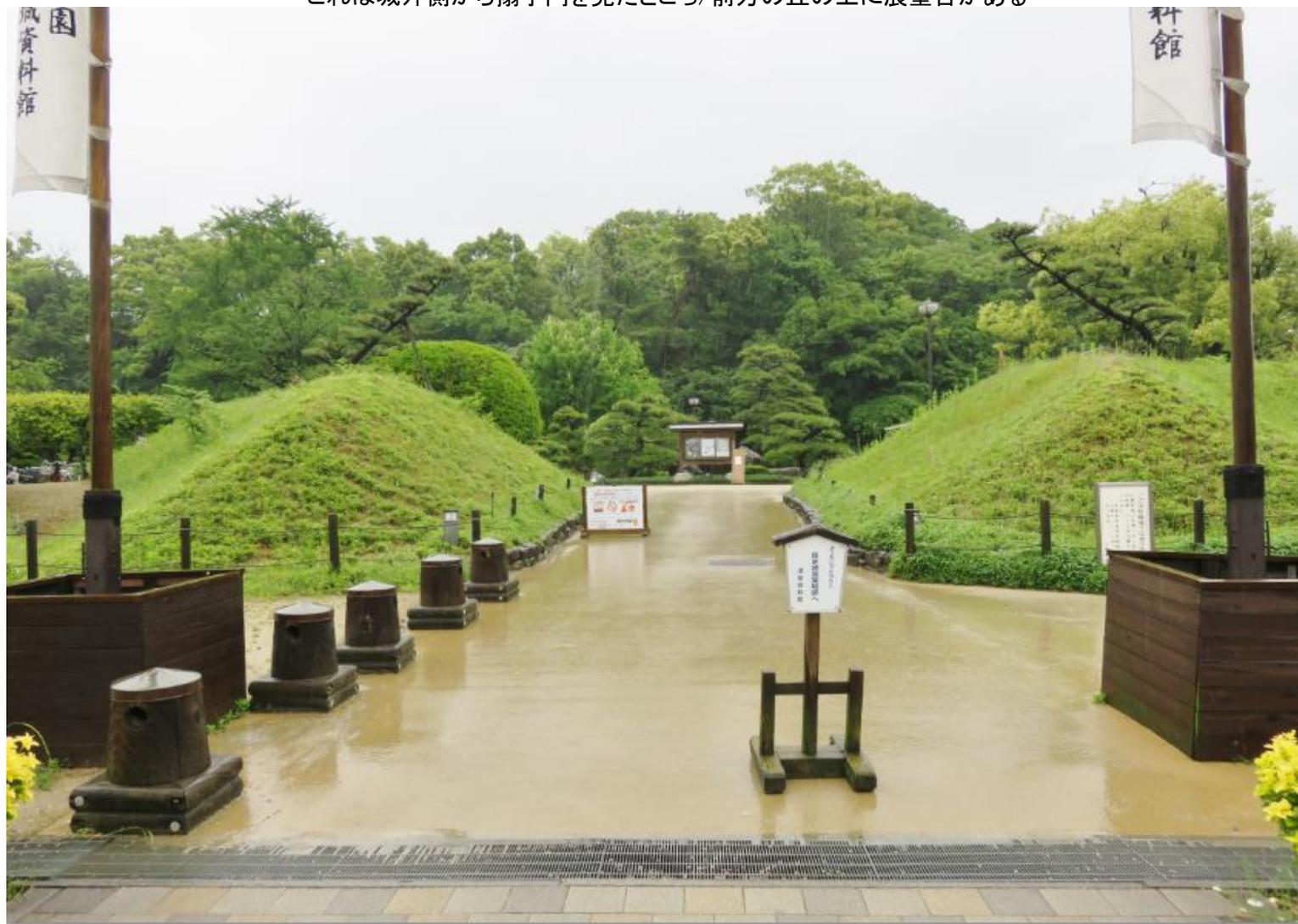
搦手門は、城の裏門のことです。河野氏の時代にここがどのように呼ばれていたかはわかりませんが、江戸時代に書かれた『よ しょうぐんこう りげんしゅう予陽郡郷俚諺集』に「東西に門有、城は東表也」と書かれています。

発掘調査では、二つの段階の門が確認されています。外堀が約2メートルの水路によって続いていた時期は木橋が掛けられていたようですが、後に水路は埋められて土橋になっています。門も、内側に後退して建てられています。また、いずれの段階でも門をくぐって外に排水する溝が設けられていました。



搦手門復元イメージ

これは城外側から搦手門を見たところ/前方の丘の上に展望台がある



右手の外堀土塁を見たところ/外堀は駐車場となって埋められてしまっている



説明坂がある



左手の外堀を見たところ/こちらの外堀土塁はこの先消滅している



搦手門の土橋から城内側を見たところ



左手(北方向)を見たところ/外堀土塁(左手)はこの先消滅している



振り返って南方向を見たところ/こちらの外堀土塁は前方で左手に回り込んで東方向へと続いている



この建物は湯築城資料館



資料館の展示/南側のエリアには家臣団居住区の立体復元や庭園区・上級武士居住区の平面表示、土壘展示室や遮蔽土壘があるようだが、大手口の確認も含めて時間切れで断念/パンフレットを貰って帰る



参考ホームページ

<http://www.geocities.co.jp/yogo139/sikoku/matuyama.htm#yudoku>

<https://akiou.wordpress.com/2014/01/06/%E6%B9%AF%E7%AF%89%E5%9F%8E/>

http://saigokunoyamajiro.blogspot.jp/2011/10/blog-post_17.html

<http://home.e-catv.ne.jp/ja5dlg/yuzuki/yuzuki.htm>

<http://sengokutan9.com/Oshiro/Ehime/yudukijyou.html>

<http://2nd.geocities.jp/edenno3/kenngai/yuzuki/yuzuki.html>

